

「五感に響け 新しい波」 第18回 大分県民芸術文化祭参加行事

第18回 横光利一俳句大会

～入賞作品集～



表彰式 平成28年10月22日(土) 午後2:00～3:30

宇佐市民図書館 視聴覚ホール

主催／宇佐市・宇佐市教育委員会・豊の国宇佐市塾
後援／大分県・大分県民芸術文化祭実行委員会・NHK 大分放送局
OBS 大分放送・TOS テレビ大分・OAB 大分朝日放送

ごあいさつ

「横光利一俳句大会」も、今年で十八回目を迎えることとなりました。今年もまた、国内外から、たくさんのご応募をいただきました。これもひとえに、この会を支えてくださるみなさまのおかげと感謝申し上げます。

また、一昨年から、新たに写真家の浅井慎平先生と俳人の野中亮介先生に選者をお願いしてから三年目を迎えることになりました。両先生におかれましては、ご多忙の中、本大会を力強くけん引していただき、まことにありがとうございます。

今回の応募総数は四八二二句で、内訳は、一般の部が一七二四句、中学生以下の部が四八二二句でした。また、団体応募は、県内外の小・中・高等学校を中心に、三三校から三〇九七句に及ぶ作品をいただきました。応募人数は一九四〇人。うち、一般応募が四一三人、中学生以下が一五二七人でした。

全国からいただく大人のみなさまからの作品はもとより、市内をはじめとする小中高等学校から寄せられる児童・生徒さんからのたくさん作品にも、主催者一同、毎年大奨励まされております。学校からの団体応募につきましては、先生方のご協力にも御礼申し上げます。

さて、横光利一の生誕百年を記念して平成十一年に産声をあげた本大会も、人間にたとえればそろそろ高校を卒業する年齢にさしかかり、再来年の「横光利一生誕二二〇年」および本大会の「成人式」も視野に入ってまいりました。ちなみに、過去十八年間の応募総数は十三万五〇〇〇句を超え、応募人数は延べ五万二〇〇〇人を超えております。この会がますます成長いたしますよう、今後とも引き続き、ご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

終わりに、みなさまのご健勝とご多幸を祈念いたしまして、あいさついたします。

平成二十八年十月二十二日

宇佐市長 是永修治

第十八回

「横光利一俳句大会」表彰式

式次第

- 一、開会
- 一、主催者あいさつ
- 一、表彰式（特選・秀作・佳作）
- 一、当日句入選者発表・表彰
- 一、講評 野中亮介氏（選者）
- 一、閉会

■選者■

浅井慎平氏 昭和 12 年、愛知県生まれ。写真家・俳人。句集に『二十世紀最終汽笛』、『冬の阿修羅』などがある。平成 27 年、西東三鬼賞（最優秀）受賞。

野中亮介氏 昭和 33 年、福岡県生まれ。俳人。俳人協会理事。俳誌『花鶏』（あとり）主宰。著書に句集『風の木』、鑑賞読本『俳句ころ遊び』などがある。

横 光 利 一 Riichi Yokomitsu (1898~1947)

宇佐出身の父・横光梅次郎と伊賀町（現・三重県伊賀市）出身の母・こぎくとのあいだに、父の仕事先であった福島県で生まれた（利一の本籍は生涯宇佐にあった）。

菊池寛に認められ、川端康成を紹介されて親友となる。新感覚派文学のリーダーとして、昭和初期からめざましい活躍をし、昭和十年代には「文学の神様」と称された。

代表作に「日輪」、「上海」、「機械」などがある。また、半生をかけて書き続けた未完の大作「旅愁」の後半に主人公が故郷の九州を訪ねる場面があり、そこには宇佐の自然や人々との触れ合いが描かれている。

友人・知人に俳人が多く、自らも熱心に句作をし、小説の中にも盛り込んだ。また、句会「十日会」を主宰し、俳人の水原秋桜子や石田波郷らが参加したほか、門人の石塚友二や清水基吉は、小説家のかたわら俳人としても活躍した。

1998年に生誕百年を迎え、伊賀市（三重）、世田谷区（東京）、宇佐市、鶴岡市（山形）など、全国のゆかりの地であいついで記念事業が行われ、以来、各地の交流が続けられている。「横光利一俳句大会」も、宇佐市の生誕百年記念事業の一環として始められ、現在に至っている。

第十八回 横光利一俳句大会 入賞作品

【一般の部・特選】 十句

横光利一俳句賞

カンナ咲く石工は石に股がりて

池村惇子

大分市

大分県知事賞

放蕩となりて久しき大文字

花田睦生

北九州市

宇佐市長賞

爽かや日増しに高き堰の音

荒卷勝郎

上毛町(福岡)

宇佐市議会議長賞

少年の耳のさみしき盆の月

山崎一馬

福岡市

宇佐市教育長賞

古い先の行く末案じ蚯蚓鳴く

荒井浩子

知立市

大分県北部振興局長賞

湯の町を敵機素通り終戦日

湊野陽鳥

大分市

宇佐市民図書館協議会長賞

終戦日掩体壕の中農具

阿部嬉子

大分市

豊の国宇佐市塾賞

公園の蛇口の乾く敗戦日

岡 汀子

三木町(香川)

浅井慎平選者賞

自転車を盗まれし日よ鯛雲

あがりお
上尾ヤス子

大分市

野中亮介選者賞

夏期講習窓から見えるホームラン

濱田 黎

中津市(高三)

【中学生以下の部・特選】

十句

横光利一俳句賞

夏帽子いつかの砂もそのままに

古門美羽

宇佐市北部中二年

大分県知事賞

白い波サーファーたちが動き出す

山下勇太

宇佐市北馬城小四年

宇佐市長賞

蝉の声あの日のことをさげんでる

堀添すず

宇佐市北部中一年

宇佐市議会議長賞

マムシ来たムカデもハチもやって来た

田口悠雅

宇佐市宇佐小三年

宇佐市教育長賞

夏祭りげたでちよつと背のびした

南 那奈

宇佐市駅川中二年

大分県北部振興局長賞

ごきぶりがいろんな場所へ帰ってく

柴崎美結

大分市明治小五年

宇佐市民図書館協議会長賞

妹の泣き顔トマトになっている

山下乃愛

小川町樽台中学校三年

豊の国宇佐市塾賞

六じぞう頭にはえるこけの花

杉本さくら

伊賀市柘植小四年

浅井慎平選者賞

かにさんをせわしたぼくのなつやすみ

菊地王芽

伊賀市柘植小一年

野中亮介選者賞

夏休みばつさり切ったうしろ髪

重見 茜

宇佐市院内中二年

【一般の部・秀作】五十四句

叢は育む処星月夜	浅野 都	川口市	鯖雲や一本釣りの関ん衆	小田祥子	津久見市
遊歩道杖の先なる秋の声	安部紀久子	豊後高田市	しゃぼん玉地球が一つできあがる	金澤諒和	大分市
畦ひとつ塗って棚田を這ひ上がる	安倍日出	宇佐市	銀河濃し維新の志士の生れし地	岸原邦代	岡垣町(福岡)
花の世を花ともならで散りにけり	阿部誠文	北九州市	渡り鳥地は激震の跡とどめ	黒木 豊	大分市
木染月野に紫のもの多く	石井明美	津久見市	雨音のなくて雨の香白木槿	桑野英子	福岡市
逆らへぬ老いに逆らふ生身魂	伊南朋朗	大分市	酒米の青田もありて五千石	小杉優子	豊後大野市
手のひらの広さ比べや浮いてこい	岩波千代美	大分市	枯蓮に風の迷うてゐる事実	後藤南女	大分市
油照り大き拳を持ち歩く	岩橋玲子	久留米市	星月夜たつたふたりの姉妹なり	坂本首夏生	南関町(熊本)
虫の声三面鏡を閉めてより	宇戸美和子	大分市	水を打つその手も水になりきって	佐藤佳津	津久見市
由布岳に一礼稻を刈りはじむ	大隈草生	宇佐市	秋扇とぢて女の艶話	下川富士子	玉名市
庭下駄に涼しき音を拾ひけり	大津節子	大分市	蜷の道八幡さまに通じけり	高田英子	日出町
筆筒をすこし寄せたる秋思かな	萩原都美子	秋田市	影持たぬ一木一草原爆忌	高野ちか子	大分市
ふるさとはいつもふるさと稻の花	押谷 隆	別府市	帰省子の列車トンネルへ消ゆ	高本和子	玉名市

小鳥来る珈琲館の定休日	多田淑子	広島市	独身のころのスカート星祭	樋口ひろみ	小郡市
長身揃ひ八幡の紅蓮	田中三樹彦	大分市	こぼれ萩掃くのが下手な尼ひとり	彦坂正亨	太宰府市
団栗が舞めき合ひて村しづか	為成央子 豊後高田市		青竹の箸の両細涼あらた	平田笙子	福岡市
神々の道を許され小鳥来る	坪井洋司	福岡市	踊の輪切れしところへ誘はるる	古川和子	鈴鹿市
還したくない子を還す魂送	遠見百合子 津久見市		一つ灯のひとりの暮し秋刀魚焼く	豊東美智子	大分市
ギャラリ―は風の回廊初紅葉	利國春美	高松市	秋風や父の形見の手風琴	本田幸子	大分市
竹皮を脱ぐ少年は変声期	富尾和恵	大分市	春の陽を握ってやや子産まれけり	真早流芽生	名古屋市
鬼の子の国東塔にぶら下がる	富川元女	大分市	シリウスや父亡きあとに牛遺る	益田竜昇	大分市
その道を極めて涼し行者道	中尾豊子	大分市	文豪の故郷変らず宮涼し	松村越子	大分市
台風のニュースばかりを見て一日	中田恵美子	玉名市	万緑や石が石生む石切場	松村勝美	由布市
遠花火昔日の夢見るがごと	中村祐子	福岡市	蟬穴を出づや人間住めぬ町	松本みゆき	大分市
蚊遣火や父が語らなかつたこと	中山幸枝 篠栗町(福岡)		古書店の昭和の匂ひ秋灯	村上君代	大分市
理科室の人体模型夏休み	南雲玉江	別府市	震災の子等に短い夏休み	村上哲子	熊本市
遺されし母の絵手紙菊香る	橋本真喜子	由布市	地球儀の海は穏やか震災忌	山下雄子	大分市

【中学生以下の部（小学生）・秀作】二十五句

ありがとうランドセルにも夏休み 今石響貴^{ひびき} 高家小六年

せみしぐれ晴れたら合っしょう楽しいな 岩尾美希 津房小四年

青田みてみんなのくろうがよみがえる 江口凌平 佐田小六年

風にのりひまわりたちがおおあばれ 奥田梨乃 長洲小五年

自転車で父の背を追う夏の夕 加来大凱 安心院小四年

一球のボールを追った甲子園 梶原優衣 八幡小五年

金メダル夏の星よりかがやいた 萱篤佐保 封戸小五年

ねる前の風がすすしき秋の夜 河野真子 糸口小六年

ぬけがらがセミがたびだちさみしそう 清永進吾 西馬城小五年

ふうりんのねいろかなでるゆめごころ 黒田紗羅 駅館小四年

なつまつりきんぎよとわたしおにごっこ 小林由奈^{ゆな} 安心院小一年

お盆すぎさわやかな風こんにちは 首藤優花 由布市立谷小六年

太陽より早く朝顔おきている 高橋桜子 上毛町西吉富小六年

雨の日に蛙とあそぶかたつむり 高橋莉子 宇佐小三年

道教え消える光りはほたるかな 田川乃々香 佐田小六年

ほうずきをままにおそなえてをあわす 田邊乃愛^{のあ} 和間小一年

かぶとむしぼくのいえにもとんできた 橋本煌生 伊賀市柘植小一年

はすの花背すじをのばし咲いている 松原和歩^{かずほ} 和間小六年

ばあちゃんちばったがびよんととんできた 松本きっか 宇佐小一年

きゅうりのひげネットにからんでのぼってく 三吉司 佐伯市東雲小四年

笑ってるひとみの中に花火さく 室 京花 天津小五年

花火背に父の一步はぼくの二歩 森本秀明 駅館小五年

ばあちゃんの手にたくさんの夏野菜 山本 結 宇佐小六年

日が昇りひまわりたちが手を伸ばす 吉田倅菜^{ゆきな} 大分市明治小五年

夜空さく八まん大玉みな笑顔 四井麻耶 豊川小五年

【中学生以下の部（中学生）・秀作】二十五句

ひまわりは私の人生私自身 江口彩乃 北部中一年

あとニミリなのに届かぬ真夏の恋 大西花芽^{ほるか} 西部中三年

「そこだそこ！」 1・2・3で西瓜割り 小野 心 本耶馬溪中一年

山蛭が守る山にはゴミはなし 風間雄次 小川町立樺台中三年

夕立の去った後には笑顔かな 加徳 照^{しょう} 宇佐中三年

蟬の声目覚まし代わりの登校日 河野晏奈 安心院中二年

菓をつくり子育てがんばるつばめたち 久家麻梨奈^{くが} 西部中一年

台風はみんなの心をかきみだす 榊野日渚^{ひな} 院内中一年

暑い夏部活の熱も上昇中 河野美咲 西部中二年

白線から白線で終わる勝負の夏 後藤涼花^{すずか} 西部中二年

最高の笑顔と友と夏過ごす 佐藤圭悟 安心院中三年

祭りかな窓に映った万華鏡 佐藤大輝^{たいき} 安心院中一年

グランドがぼくとあの子の天の川 佐藤龍之輔 院内中三年

扇風機つけければそこから夏はじまる 永野未来^{みく} 西部中二年

花火はなみんなの笑顔つくる火だ 中道朱李^{しゅり} 西部中一年

冷蔵庫用もないのに開けている 野田紗更 駅川中二年

大地震テントぐらしで暑い夏 野畑慧伍 西部中二年

朝顔が咲くと同時に朝が来る 馬場皓太 小川町樺台中二年

戦争の悲しみ残る宇佐平野 福島夢翔^{ゆめか} 駅川中三年

友達とひがなばな咲くへんろ道 古前太陽 高松北中一年

泣く僕をふわりと包む君と雪 松本翔太 北部中三年

かき氷夢中にほおばる君がいる 三宅るり 西部中一中

麦わらの帽子が似合う海賊王 宮本晃希 宇佐中三年

水泳で五メートルだけのびた夏 弓場悠生^{はるき} 院内中一年

そよそよと稲穂手を振る秋の暮 用正遥奈^{はるな} 北部中二年

【一般の部・佳作】一五〇句

朝かげや蘇鉄しづかに花を抱き	藍沢きよ子	別府市	城の石垣蛇穴を出るところ	今田幸正	中津市
花冷や老の歩幅のあるがまま	赤松千代子	中津市	春陰や壁に掛かりし航海図	岩田 勇	名古屋市
端居してあの世この世を見渡せり	穂山常男	八尾市	五月雨や煤けて光る自在鉤	岩花太美	上毛町(福岡)
自画像は未完となりし沙羅の花	秋山玲子	山口市	くつきりと川面に広げうるこ雲	岩本文子	津久見市
七十一年経ても八月は八月	明吉享子	東久留米市	鎌研いで心地良き日や秋の水	白木すなえ	上毛町(福岡)
甲子園汗と涙と思ひ出を	芦田遥奈	中津市(高二)	夏草の進むべき道塞ぎをり	宇野木邦子	熊本市
踊子に色なき風の通りけり	天野真由美	福岡市	流れ来る終い雛子が菊の雨	浦田穂積	唐津市
手袋をはめてひとつの老い隠す	安藤しげる	佐伯市	大航海の赤とんぼ草のマストに揺れて裏	文子	由布市
振り向かず白服の吾子搭乗す	池上淑子	玉名市	虫時雨分け入る先に磨崖仏	占部耕三	所沢市
嵐去り夜も深けゆかば虫時雨	池邊静子	大分市	父が居てその父が居て春隣	江口美佐子	宇佐市
初東風や瀬見の小川の樹の匂い	井田寿一	東近江市	春の海妊婦は腹を愛撫する	エドゥアルド・タラ	ルーマニア
緑蔭の石段まずは文殊堂	伊東慶子	諏訪市	潮騒の遙けし遠し茸狩り	江藤清彦	別府市
ほほづきを母と鳴せし昭和かな	糸永悦子	別府市	いま拭きし玻璃戸に映る小鳥かな	江藤ひで	佐伯市
緑蔭に五百羅漢の泣き笑ひ	糸長閑圃	宇佐市	千枚田海へ傾るる豊の秋	遠入英子	福岡市
シクラメン咲かせ農業科男子	井上 實	亀岡市	絆つぐ掌の大ききよ遠花火	大石恵子	中津市
虹仰ぐ円周率は知らねども	井上寿子	直方市	深々と村の眠りや天の川	大石敏子	上毛町(福岡)
夏休み風が大きな扉押す	井ノ口睦子	中津市	新涼の幣と法螺の音豊前坊	大江正人	中津市
			紫陽花や裏木戸くぐる蛇目傘	大木本法通	上毛町(福岡)
			山焼や激しい恋の行き止まり	太田省三	池田市

雷の消す君の言の葉もう一度	大西笹風	東大阪市	盆踊母がにはかに若返る	工藤ミヨコ	大分市
水分の音軽やかや稲の花	岡嶋 明	宇佐市	車椅子乗る人のなき盆の月	久保英代	宇佐市
花野風風土記の丘へ渡りけり	岡 孝子	大分市	水番のうずくまりる草の間	熊谷文子	上毛町(福岡)
幟立つ耶馬の山城春田打つ	尾形 忍	上毛町(福岡)	裏山に小雨の残る大文字	小池令子	京都市
特攻の跡地の黙や稲の花	奥野律子	宇佐市	凍月や蠟燭の芯じじと啼く	古賀京子	大牟田市
沈み橋姿現し秋の声	小野啓々	大分市	引き売りの豆腐のラッパ夏の果て	古久保 登	京都市
桐一葉言ひたき事も言はずして	甲斐梶朗	別府市	雲流れ迷ひも流れ風薫る	小林勝子	福山市
銀芒不良の頃の我に似る	梶谷保子	宇佐市	秋来たり校歌の海の波を聴く	斉藤浩美	東海市
洞を出てこの世の蝶となりにけり	梶原マサ子	宗像市	夏惜しむ「17才」を聴きながら	坂本雅則	名古屋市
折りとれば風の飛びつく猫じやらし	片岡 学	別府市	一山の暗き所の葛の花	佐々木多恵	別府市
帰省子や父の匂ひの父の部屋	加藤美穂	玉名市	水口を隠しておりぬ襖萩	佐藤一男	大分市
草むしる母の後ろ背小さくて	神本多貴子	中津市	溪谷に川舟走る紅葉かな	佐藤邦夫	岡山市
朝顔の折り目正しく開きけり	河野二三子	宇佐市	コスモスの揺るるも山の動かざる	佐藤 浩	津久見市
鳥追いの音こだまする石仏路	河村美智代	臼杵市	眠らむと街の賑はふ横光忌	佐野鬼人	富士宮市
我が思い桜の雨に染められる	神部哲平	中津市(高二)	耳許で話す看護士秋さやか	重光絹子	豊後高田市
一斉に空をかつぎて秋神輿	岸本恵美	大分市	野分きてなおも小さき村となり	嶋 良二	日進市
花吹雪浴びて子供に戻りけり	木下テル子	上毛町(福岡)	原爆の遺品のやうな辛夷の実	白石多重子	江東区
楽しみは郵便受けとあげはちよう	木村鉄郎	熊本市	雷雲の中の孤島やカモメ啼く	新海 均	所沢市
幼子の母の後追ふ跣足かな	清松睦美	佐伯市	初螢気づかぬ君の影と消ゆ	菅尾雅江	沼津市

甲子園声まで日焼けしてをりぬ	相馬正道	八戸市	われを呼ぶ父の大声終戦日	中村宏枝	中津市
柿の花こぼれ望郷絶ち難し	園田武子	大分市	信州の薪の高さや初紅葉	中村りょうこ	福岡市
マネキンの横向きの鼻夏の昼	高木ミツヨ	玉名市	鳳仙花手足の長きをんなのこ	長山香織	横浜市
行く雲も一期一会や夏深し	竹光直子	別府市	特急がコスモスの駅置いてゆく	西 愛子	中津市
頬杖の横顔涼しカシニヨール	田島美栄子	福岡市	夏越祭御輿昇く手の力瘤	入学ひさみ	宇佐市
川風に蜻蛉ふゆる通学路	多田裕英	三木町(香川)	冬というレンズに蒼き月の肌	子延忍人	渋谷区
表札の薄れし文字や秋あかね	田長丸桂子	中津市	母の声聞きて枇杷の実育ちけり	信安淳子	岡山市
説教の牧師のアロハ姿かな	田中和美	横浜市	しゃぼん玉探しに行つてそれつきり	野村千壽子	津島市
車いす日永に押せば妻眠る	千島宏明	藤岡市	大残暑乗り切る老の熱湯かな	橋本紅洞	大分市
芋の葉の解きては巻きて早なほ	土谷良子	豊後高田市	冬の山まるで立派な角隠し	原戸遙花	中津市(高一)
豆飯の炊ける匂いや母の顔	角森玲子	安来市	山梔子の花の香りや父惚ぶ	疋田恵子	佐伯市
落ち葉ふむ夫の足音残る路	長岩ヨシ子	宇佐市	清流の空にありけり秋茜	樋口通子	宇佐市
雪の夜の昔に誘う遠汽笛	中川雄策	大磯町(神奈川)	遠雷に仁王は拳振り上げて	樋田征子	宇佐市
水打つて料亭の朝始まれり	中出美司子	京都市	父の忌に嫌いな父と会う麦秋	日野百草	日野市
冬用意おのれ温む物をまづ	中野清彦	伊豆市	風鈴や本音で語る友と居る	平井利恵	一宮市
図書館に山かむさりて麦の秋	中野ちよ	伊豆市	過ぎし日はみな輝きて遠花火	平田節子	大分市
登校班新入生を真ん中に	永松市夫	宇佐市	唐突に人を恋ふこと曼珠沙華	平田初子	大分市
慰霊碑のわきに鉄砲百合の花	永松悦子	宇佐市	冷奴崩して本題まで遠く	平田八重子	福山市
青蜜柑時折乙女に帰る老母	中村重幸	北九州市	昏れぎはの舞姑の紅や貴船川床	廣崎和代子	玉名市

炎昼やことりとせぬ夫の部屋	福島洋子	中津市	山門の聳ゆる辺り秋茜	村上千代	日野町(滋賀)
鬼灯の枯れても朱の色残す	藤井淳子	大分市	文机にペーパーナイフと椿の実	森次洋子	大分市
母は今幼児の夏を生きてゐる	藤井隼子	大分市	鬼の子の頭なずれば大揺れす	森永英子	玉名市
ささやかな決断に剝く青蜜柑	藤崎由希子	宗像市	水鉄砲街で乱射の天使たち	森山 茂	鎌倉市
死ぬときは薄きがよろし夏蒲団	藤本正吾	上毛町(福岡)	修業僧真菰むしろを編みにけり	森山暢子	松江市
石垣のこんな所に菫の花	二村久美	津久見市	母の死を受ける背中に蟬時雨	山縣敏夫	岩国市
秋の蝶由緒正しき紋所	古川光代	津久見市	うす紅は夫の好物茗荷漬	山口須磨子	中津市
里神楽舞ふをのこらの手の無骨	古荘浩子	熊本市	朝顔のメキシコ湾と色合せ	山村介夫	大分市
沢水の音を吸い込み山眠る	星野春男	中津市	秋風や奮いたたせる前頭葉	山元金子	津久見市
万緑を分けて仁王の立ち上がる	細谷拡一	中津市	杉林秀先揃ひて秋涼し	山本健人	大分市
龍神の裾よりふくれ葉月潮	本田加志子	玉名市	一夏の恋に一発ホームラン	山本真斗	中津市(高一)
原爆忌空は落書き禁止です	本間満美	横浜市	秋天を集めて幼な子のまなこ	横田美佐子	佐伯市
洗ひ髪女の灯す仄明り	松原幹夫	由布市	的はじけ流鏑馬の森動き出す	吉武千束	中津市
筆圧の強き句集や星月夜	松本己代子	中津市	声までもずぶぬれにして水遊び	吉浦百合子	周南市
海峡の跳ね橋跳ねて天高し	真鍋史子	北九州市	白髪で迎ふる夫や盆灯籠	吉本シトミ	玉名市
登校の子ら一列に台風過	水田和代	臼杵市	洞門の粗き鑿あと夏つばめ	吉本友一	上毛町(福岡)
花疲れ恋の疲れも湯の中へ	水村 凜	和歌山市	空真青即かず離れず蝶は舞う	米持知子	宇佐市
緑陰やせせらぎに居るこちして	宮崎道子	中津市	廃校の校舎今なく木槿咲く	和田こうせい	大分市
すすき野や幼子たちの見えかくれ	宮本昌代	宇佐市	秋澄めり羅漢の笑ふ寺を訪ふ	和田慎一郎	大分市

のなかりょうすけ
講評・野中亮介氏（選者）

昭和 33 年、福岡県生まれ。現在も在住。昭和 53 年、「馬酔木」入門。水原秋櫻子に師事。秋櫻子没後は、林翔、千代田葛彦、杉山岳陽らの指導を仰ぐ。昭和 62 年、「馬酔木」同人。平成 7 年、第 10 回俳句研究賞・馬酔木賞受賞。平成 8 年、福岡市文学賞受賞。平成 9 年、『風の木』上梓。同著にて第 21 回俳人協会新人賞受賞。平成 13 年、「馬酔木」の僚誌として『花鶏』（あとり）を創刊主宰する。平成 26 年、読売新聞西部版「よみうり西部俳壇」選者に就任。俳人協会（前理事）。著書に句集『風の木』（角川書店）、鑑賞読本『俳句こころ遊び』（実業之日本社）・『俳句実作入門講座』（共著・角川書店）、『鑑賞 女性俳句の世界』（共著・角川学芸出版）、『林翔の一〇〇句を読む』（共著・飯塚書店）などがある。

memo

第17回「横光利一俳句大会」表彰式当日句入選作品(平成27年10月24日)

野中亮介・選

【特選】五句

生みたての卵を買ひに天高し
眉目秀麗長身の案山子かな
豊前路を南へ秋の高きこと
掩体壕のむつつり坐り雁の頃
大楠の幣ひるがへり秋のこゑ

下川富士子(玉名市)
田中三樹彦(大分市)
平田笙子(福岡市)
岩橋玲子(久留米市)
淵野陽鳥(大分市)

【秀作】五句

神の留守スターバックスは満席
吾亦紅さらに短き母の髪
黒葡萄食べつつ語る恋の憂さ
秋深き追悼集の薄さかな
菊の風包む受賞の夢一つ

富川泉子(大分市)
藤原弘美(北九州市)
井手久美子(北九州市)
清瀬善三(宇佐市)
浦田穂積(唐津市)

編集・発行 宇佐市民図書館 平成28(2016年)10月22日

〒879-0453 大分県宇佐市上田1017-1

TEL.0978-33-4600 FAX.0978-33-4679

URL.<http://www.usa-public-library.jp/>